

【小学校 第3学年 国語科】

短歌で楽しもう「まるで暗号?!言葉遊びで万葉集にちょうせん」

平群町立平群北小学校

中澤哲也

1. 単元名 短歌で楽しもう「まるで暗号?!言葉遊びで万葉集にちょうせん」

2. 単元の目標

○万葉集に使われている言葉遊びの面白さに気づき、進んで短歌を作ろうとしている。

(国語への関心・意欲・態度)

○易しい文語調の短歌について、情景を思い浮かべたり、リズムを感じ取りながら音読や暗唱をしたりする。

(伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項)

○万葉集で使われている数遊びの意味を理解し、それらを利用して言葉を考え表現する。

(伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項)

3. 単元について

(教材観)

万葉集は、今から1000年以上も前に作られた日本で最も古い歌集である。当時の天皇や貴族から下級役人など、様々な身分の人間が詠んだ歌を4500首以上も集められたもので、歌の中には、恋人を思う気持ちや、遠く離れた家族を思う気持ち、自然の素晴らしさなどを表現したものが多く、現代の歌にも大変通ずるものがある。

万葉集の歌の中にはたくさんの言葉遊びが使われている。例えば、「若草乃 新手枕乎 牧始而 夜哉 将間 二八十一不在国 (巻11・二五四二)」という歌の「八十一」は「くく」と詠まれている。これは、九九を使って、表現されたものである。ここから、漢字と同じように、九九も中国から伝わったものであることがわかる。また、「毎見 恋者雖益 色二山上復有山者 一可知美 (巻9・一七八七)」の「山上復有山」は漢字の「山」の上に「山」があるので、つなげて「出」という意味で表現されたものである。

こういった万葉集の言葉遊びの面白さに気付きながら、実際に自分たちで活用し、1000年以上も前の人たちと同じように楽しく短歌を作成することを通して、日本文化に対する関心を育みたい。

(児童観)

本学級の児童は1学期の「俳句を楽しもう」の単元で、5音と7音の組み合わせによって詠まれた俳句をリズムよく読むことの面白さや心地よさに気づき、自ら進んで教科書の俳句を暗唱したり、情景を思い浮かべて絵を描いたり、俳句を楽しんで学習することができた。本単元の「短歌」は初めて学習する単元ではあるが、5音と7音の言葉で奏でるリズムの心地よさを感じながら詠むだけでなく、万葉集の言葉遊びを使いながら、自ら作ってみようという意欲をもって、学習していきたい。

(指導観)



本単元は、短歌を詠んで文語調のリズム感に親しむだけでなく、万葉集で使われている言葉遊びの面白さに気づき、実際に自分たちでそれを用いて短歌を作成していく学習である。

短歌を初めて学習するにあたって、抵抗がないように、1学期で学んだ俳句を想起させ、教科書で紹介されている短歌を詠みながら5音と7音のリズム感の心地よさを味わわせたい。

万葉集の「数遊び」の九九を使った表現では、九九のできるいろいろな言葉や文字をみんなで出し合いながら、教室に掲示しいつでも確認できるようにする。漢字を使った「言葉遊び」では、「田の下に心」と書いて「思」と読んだり、「木に一」と書いて「本」と読んだりするなど、クイズ感覚で楽しく出し合っていきたい。

実際に短歌を作成していくにあたって、まずはみんなで5音と7音の言葉を出し合い、ランダムに混ぜて短歌作るなど、短歌を作るにあたっての難しさを取り除くことで、自由に発想しながら作成していくと考える。できた作品は「何と詠むでしょう?」といったクイズ形式で発表し合いながら、詠む楽しさにもふれていき、クラスの歌集を作っていきたい。

3. 単元展開の概要 (全3時間)

次	主な学習活動	指導上の留意点
一	<p>1. 短歌について知る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 教科書の短歌を詠み、俳句と同じ5音と7音の組み合わせでできていることに気づく。 ○ 教科書の短歌をリズムよく詠む。 ○ 自分のお気に入りの短歌を選び、視写する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・1学期に学習した俳句をもう一度読み返させリズムよく詠む楽しさを思い出させる。 ・校歌も5音と7音の組み合わせで出来ていることを紹介しさらに関心を持たせる。 ・一人で詠んだり、みんなで声を合わせて詠んだりするなど、声に出して詠む楽しさを味わわせる。
二	<p>2. 短歌を作る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 5音と7音の言葉を短冊に書き、別々の箱に入れ、ランダムにつなぎながら短歌を作ったり、声を合わせて詠んだりする。 	 <ul style="list-style-type: none"> ・ランダムに作った短歌でもリズムよく詠むことで歌のように聞こえてくる面白さを実感させることで、作品を作る難しさを取り除く。
三	<p>3. 万葉集の「言葉遊び」について知る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 「言葉遊び」を用いた万葉集を詠む。 ○ 万葉集と同じような「言葉遊び」を使ってどんな言葉ができるか言葉集めをし、ノートに書き出し、発表する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・万葉集について簡単に紹介する。 ・漢字だけでなく、九九も中国で作られ、日本に伝わったことなども紹介する。 ・クイズ形式にするなど、友だちのいい工夫をたくさん見つけさせる。

4. 実践を終えて

本実践の成果は次の二点であると考え。一つ目は児童の短歌への関心について、二つ目に児童の万葉集に対しての興味付けについてである。

まず一つ目の児童の短歌への関心についてである。導入で1学期に学習した俳句の中の一句を紹介すると、すぐに詠み方を思い出し、5・7・5のリズムで詠むことができた。そのおかげで抵抗なく、教科書の短歌を詠む時も、文語調のリズムに親しむことができた。また、百人一首と読み方が似ているなど、自分の生活経験と学習内容を結びつけることができた児童もいた。第二次の活動では、自分たちが考えた言葉がランダムで短歌になっていく様子が面白く感じたのか、教科書の短歌を詠むよりも大きな声で詠むことができた。このことから、児童にとって短歌を作ったり詠んだりすることに意欲を持って取り組めたのではないかと考える。

次に二つ目の児童の万葉集に対しての興味付けについてである。本単元では万葉集に使われている「言葉遊び（主に数字）」を取り上げた。児童には「1000年前の人からの暗号文」とし、何と読むかをクイズ形式で考えさせたことで、万葉集に関心を持たせることができた。九九を使って解く暗号だとわかると、自分たちにも作ることができそうという意欲にも繋がった。グループでいくつか「言葉遊び」を使った暗号を作成した。以下の暗号が児童が作成したものである。

- | |
|---|
| <ul style="list-style-type: none">・海に三五（サンゴ）がいる。　・三十六（くし）カツを食べる。　・紅葉の六十四（はっぱ）。・おふろを二十二十（ごしごし）あらう。　・三十六（しく）じった。　・ぼくは十六（しし）座だ。・十八（にく）が二十七（くさ）っている。　・三七（ツイ）ッターを見る。など |
|---|

このように数遊びの仕組みを十分に理解し、考え、作成したことがわかる。また、このような遊びが1000年前の人々も行なわれていたことに驚いている様子も見られた。

以上の二点から本単元の学習を通して、児童は短歌に関する関心の高まりや、万葉集に対する興味付けができたのではないかと考える。